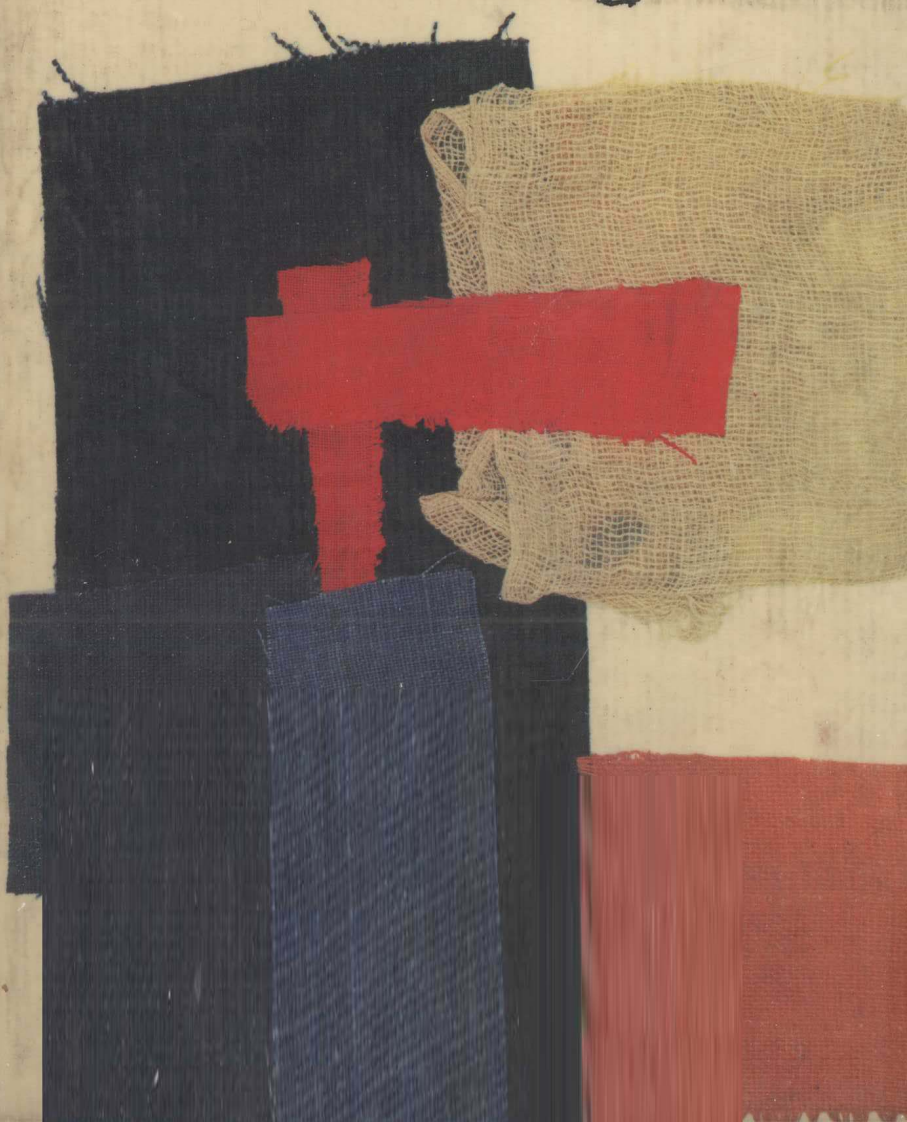


放浪家族

船山鼓香



浪家族

船山聲香小說全集

第七卷

河出書房新社

船山馨小説全集 第七卷

昭和五十年六月十日 初版印刷

昭和五十年六月十五日 初版発行

著 者 船山 馨

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七二

印刷 多田印刷

製本 小高製本

©1975 KAORU FUNAYAMA

定価はカバー・帯に表示しております

目次

放浪家族

解説・進藤純孝

装
幀

佐
野
繁
次
郎

船山馨小說全集 第七卷

放浪家族

ハード・ボイルド

「もしもし、堀田です」

どうぞ、という交換手の声の切れるのを待って、彼は自分の名を言った。

かならず相手に先んじて名乗るという電話の作法も、このごろでは影が薄くなってきているが、堀田一郎は律義にその習慣を崩さない。ただ声が野太いので、いかにもぶっきらぼうに聞こえる。

「ああ、お父さん？ わたし……」

受話器のなかに、湿りをおびた若い女の声が返ってきた。

「珠子か。どこからかけている。京都か」

「いま東京へ着いたところです。ねえ、お父さん、すぐお会いしたいんです」

「仕事中だ。家へ行っていなさい」

「それが、みんな出かけているらしくて、いくら信号がいっても、誰も出ないんですもの。今日はもう、会社いいんでし

よう」

「克彦君とはちがう。どこかで、すこし暇つぶしをしてから、家へ行きなさい」

「暇をつぶすって、どこで……。わたし、いまひとりになっているの辛いんです。誰かそばについていてくれないと、淋しくて……」

「子供じゃあるまいし、甘ったれたことを言うんじゃない。忙しいんだ。切るよ」

珠子がすがりつくように、なにか言いかけるのを構いつけずに、一郎は受話器を置いて立ちあがった。

長女の珠子が結婚して、京都へ行ってから、もう二年ちかくなる。夫の井汲克彦はある私立大学の史学科の講師をしている。

あいつも、すっかり学校の先生の女房が板についてきたな。土曜日は誰も彼も半ドンだと思い込んでいる――。

株式課の部屋を出て、廊下をエレベーターのほうへ歩いてゆきながら、一郎はそう思って胸の片隅で微笑した。

それにしても、彼女の様子がちょっと気にならないではなかった。

結婚してから二年ほどのあいだに、珠子が東京へ来たのは二度きりしかない。いちどは里帰りで克彦と一緒にあったし、二度目も学会に出席する克彦について来たので、ひとり

というのは今度がはじめてである。そのくせ、ひとりであるのが辛いなどと言っている。

一郎はむかしから、公私の別をはっきりさせないと気のすまない性質だから、家族の誰にも、やたらに私用で会社へ訪ねてきたり、電話をかけてよこしたりするのは禁じてある。

そのことは、珠子ももちろん承知しているはずであった。亭主と喧嘩でもしたのである。しようない奴だ——。

四階の総務部長室の前で、彼は立ちどまった。

総務部長の河瀬満男は、半年ほど前に名古屋の支社から榮転してきたばかりであった。まだ四十前だというのに、総務部長とともに取締役を兼ねている。社長の姻戚だということ、社内では近い将来の専務だと噂されていた。

一郎も部課長会議の席などで、顔だけは知っている。しかしはるか末席の彼からは、河瀬は遠い存在であった。話しかけられたこともないし、話しかけたこともない。名指しで彼に呼ばれたりしたのは、これがはじめてであった。

彼は扉をノックして、なかへ入ると、

「お呼びですか」

と、持ち前の不愛想な声で言って、こころもち頭を下げた。

河瀬総務部長は正面の広いデスクの向こうで、ゆったりとした革張りの椅子に背をもたれたまま、束の間、めずらしい動

物でも観察するような眼差しで、彼を見つめた。それから、ゆっくり立ちあがって、傍らの応接用のソファに席を移した。

「まあ、掛けたまえ」

細身の体を包んだ洒落た仕立の上衣の内ポケットから鼈甲製のシガレット・ケースをとりだし、ライターを摺って、ひと息煙草を喫い込んでからそう言っ、河瀬は眼の前のソファに軽く顎をしゃくった。女のように柔和な、細い声であった。

「じつはね、ちょっと気になる噂を耳にしたものだから、君の意見を聴こうと思ってね」

失礼しますと断わって、一郎が腰をかけると、河瀬は膝に落ちた煙草の灰を、神経質に長い指で弾きながら言った。

「どういうことでしょうか」

「うちの株が最近、妙な動きかたをしているというんだがね。なにか君の気づいたことはないかね」

「妙な動きと申しますと？」

「誰か特定の人間が、特定の意図で、株を集めにかかっているのではないか、ということだよ」

「そういうことは、ないと思います。すくなくとも、今までのところは、疑わしい点はありません」

一郎はすこし考えてから、きっぱりとした口調で答えた。

「それならよろしい。この種の噂は意識的に流される場合もありが、裏づけのある話でもないから、僕も本気で気に病んでゐるわけじゃない。どうということはないのだが、充分に注意だけはしててくれたまえ」

「わかりました」

と、一郎はソファから腰を浮かしかけたが、河瀬は手をあげて、それを抑えた。

「まあ、いいじゃないか。すこし話してゆかんか。ところで、君はゴルフはどうだ」

「できません」

「できんのかね、やらんのかね」

「やらないから、できないのです」

「威張ることはないだろう。いまだきゴルフもやらんでは、仕事にも差しつかえんかね。どうだ、これから川奈へ行くんだが、一緒に来たまえ。僕がコーチしてあげよう」

「せっかくですが、興味がありません。それにゴルフを知らないために、仕事に差しつかえたこともありません」

「はつきり言うね」

河瀬はいくらか自けた表情になった。

「あんな愉しいものが、どうして嫌いなのかな。いまだき新社員だって、気の利いたのはみんなやるじゃないか」

「やったことがないので、愉しいかどうか、好きか嫌いか、

私にはわかりません。ただ、こう猫も杓子もゴルフ全盛になると、やる気がしないのです」

「僕もその猫か杓子のうちだつてことになるな。評判通りの天邪鬼だ、君は……。君にはなにか、余技とか愉しみとかいうものはないのかね」

「むかしは剣道をやっていました」

「剣道って、あの竹の棒で擲りあう、あれか……」

河瀬は眉をひそめた。野蠻な男だと言わんばかりの薄嗤いが、瞳孔の小さい、一重の細い眼のなかをよぎった。

「はあ」

と、一郎は無頓着に頷いた。

「しかし、それも学生時代のことで、いまでは道具をつけただけで、息切れがするでしょうな。まあ愉しみと言えば、おでん屋で一杯やるくらいのことです」

「堀田君。君いくつだね」

「この春で五十二になりました」

「その年で、安酒を飲むことしか能がないのかね」

「酒を飲むのは愉しみで、能のあるなしとは無関係です」

「それだ。酒と直情径行のほかは、と訂正しておこう。君は自分の渾名を知つとるかね」

「知りません」

「ハード・ボイルドと言うんだそうぞ」

「わかりませんね。私と推理小説と、どう関係があるんですよ」

「堅茹^トでということさ。君が融通の利かないコチコチだという意味だ。堅茹^トでの卵みたいに、味もそっけもなくて、喰えたもんじゃないという意味も含めてあるのだろうな」

「なるほど。巧いですな」

一郎は笑いだした。

「君が感心してるんじゃないや世話なしだ」
河瀬はあきれたというふうには膝を叩いて、ソファから腰をあげた。彼の立ちあがる気配を察して、その前に一郎は椅子を離れていた。御機嫌とりはしないが、礼儀はつくすというやりかたである。

「とにかく君、いまどき直情径^ト行とか、頑固なんてのは、三文の値打ちもないんだからね。生きてゆく邪魔になるばかりだよ。君の歳じゃ、もう遅すぎるかもしれないが、まあよく考えるんだね」

「はあ。できるだけ御忠告を無にしないように努めます」

一郎はそう言って部屋を出た。

彼も自分の課の若い連中がかねがね、甘い会社の塩^{しほ}ッぱい男、などと、自分のことを酒の肴^{さか}にしているのは知っていた。

甘い会社というのは精糖会社だからで、これも秀逸^{しゆいつ}だとは思っていたが、ハード・ボイルドはいいと、彼は廊下へ出て

も顔の笑いを消しきれなかった。

河瀬のあけすけな言いかたも、愉快ではなかったが、かくべつ気にもならなかった。だいいち、一郎は周りで言うほど自分を頑固^トだとも、直情径^ト行型だとも思っていないかった。ごく平凡な、平均的日本人のつもりであった。

ただ、三十年ちかい歳月が積って、サラリーマン生活の総決算が、あと数年に迫ってきてみると、その成果が平均的サラリーマンの域に達しているという自信は、彼にもなかった。

一郎は三崎精糖以外の会社を知らない。大学を出てすぐ入社し、途中で三年ほど戦争に行ったブランクはあるが、一貫してこの会社で働いてきている。

三崎精糖は現会長の三崎重治郎翁が一代で築きあげた会社であった。

いまでこそ三崎精糖も、五指に入る業界の大手筋にのしあがっているが、一郎が入社したころは、まだ再製糖の小会社にすぎなかった。資本も言うに足りないし、人間もすくない。いきおい社長も工員もなかった。すごしても業績をのばそうとして、みんな夢中で働いた。もちろん、一郎も例外ではなかった。

そのころの同僚で、いまも会社に残っている少数の仲間には、いずれも部長、支社長級である。ひとりは重役室に納ま

っている。一郎は六年ほど前に、ようやく株式課長になった。

株式課というところは、会社としては第一線の部署ではない。株券の名義書換の時期にすこし忙しい思いをするにはするが、それもまったく事務的な忙しさであって、会社の業績に直接参加するような、生きた繁忙とは遠い。いわば閑職であった。

そうして、そのまま彼はそこに据え置かれている。いまでは、ほとんどの上司が彼の後輩であった。停年まであと三年足らず。どうやら現在の位置が彼の終着駅になりそうであった。

彼のこの現実が周囲の眼からは、河瀬の言うように「直情径行が生きてゆく邪魔」になった結果と見えるのであろう。すると、やはり俺は人並よりいくらか頑固なのかな。ハー・ド・ボイルドなんて渾名がつくくらいだから――。

と、一郎は心のなかで呟いた。

しかし、株式課の自分の席へ戻ったときには、そんなことは脳裡から消えてしまっていた。

彼は受話器をとって、兼万証券の第二課長を呼びだした。

兼万証券は大手の証券会社で、砂糖などの食品株は第二課が担当している。課長の緒方東作は一郎の大学時代の後輩で、おなじ剣道部の選手をしていたころからつきあいがつづ

いている。気のおけない俺お前の古馴染であった。

「堀田だ。ちょっと話したいことがある。これからそっちへ行っていいか」

「あいにくだが、これから結婚式に出なくてはならんのだ。夕方には体が空くから、れいのところで落ち会おう」

いつものせわしげな調子であった。

れいのところと緒方が言ったのは、新宿の三越裏にある「田沢」という東北料理の店のことである。

むかしからの店で、一郎も緒方も学生のころからの馴染だから、れいのところというだけで二人には通じあう。もう六十をすぎた女主人が秋田の角館の出で、揃いの木綿紬の元禄袖で働いている女の子たちも、みんな秋田の娘である。店の名は田沢湖にちなんであった。

一郎は五時をすこし回ってから会社を出た。

飲み屋の時間には早い、用もないのにいつまでも席に坐っている、課員たちが可哀想であった。

五月の末だというのに、この二、三日真夏のような蒸し暑さがつづいていたが、さすがに表へ出ると、まだ陽射しは強いものの、舗道を渡るそよ風が肌に心地よかった。日本橋までゆっくり歩いて、地下鉄で新宿へ出た。

田沢はまだ暖簾が出ていなかったが、自分の家のような気易さで、彼は構わず店へ入っていった。

「おや、また今日はお早いこと」

手拭をかぶった割烹着姿で、女の子たちと下ごしらえをしていた女主人の友代が顔をあげた。

「緒方とここで会うんでね」

雪裘を吊した壁際の、隅のとまり木に腰をおろしながら、一郎は言った。長年の習慣で、この店ではそこが彼の席のようになっている。

「燗の用意はまだなんだろう。さきに冷やで一杯もらおうか」

「はいきた。堀田さんの好きな鮭ずしが、ちょうど漬かりごろだから、食べてみてけれせ」

年に似合わない、打てば響くといった調子で、友代は小柄な軀をきびきびと動かしながら、菰樽から一合枧に移した酒と、鮭の麴漬けの小皿を運んできた。

「ありがたいね」

一郎は煙草に火をつけて、上衣を脱いだ。

「おばさん、どうだい。俺は頑固かね」

枧の隅から冷い酒をひと口咽喉へ流し込んで、笑いながら彼は訊いた。

「ンだすな……。まんず相当なもんでねえすか」

「ふうん……。相当なもんか」

「まんず、そだすべ。わたすほどではなかんべどもな」

「おばさんと一緒にされちゃかなわない。いまでも嫌な客には、錢ぜにこ要らねすけ、帰ってけれせ、だからな」

「このごろは髪結いの亭主みたいな、頼りない男が流行りだそうだすども、人間、自分がこうと思ったことには、頑固なくらいでねば、だめだて。ことに男はね」

友代は眼を細めて笑った。

そこへ緒方が入ってきた。

「おばさん、お土産だ」

彼は提げていた婚礼の土産物の包みを友代に突き出して、モーニングの裾を割って、とまり木に一郎とならんだ。

「どうも、この恰好で街を歩くのは、サマにならん。ちんどん屋のお披露目ってとこだな」

「仲人か」

「いや俺の課にいた女の子なもんでね。三年以内にいい相手を見つけて結婚する、それ以上は勤めないって、入社したころから友だちに宣言していたそうだがね。二年四カ月で目標額を消化しちまったわけだ。気が利いてやさしくて、いまだき稀らしいいい子だったんだがな」

緒方はそう言って、運ばれてきたビールを咽喉へ流し込んだ。彼はむかしからビールしか飲まない。

「それにしても、あんななよした男のどこがいいんだろうな。花嫁さんはもうもり食って飲んで、きやつきはしや

いで、ちっとも物おじしないのに、花婿はときどき、おちよぽ口をしてしとやかにニンマリするだけで、借りて来た猫みたいに、かたくなって坐ったきりさ。それを、おふくろが心配でたまらんといったふうで、ちよろちよろ寄って行つては、ネクタイを直してやつたりしていやる。まるで幼稚園の入園式だね。過保護もいいとこだよ」

「だども、この先息子さん夫婦と一緒に暮らすわけではないでしょう」

友代が爛をはじめながら口をはさんだ。

「一緒に暮らすさ。母ひとり子ひとりの家だからね」

「へえ。ばば抜きでねえすか」

「古い、古い。家つきカーつきは常識だが、ばばア抜きってのは、もうはやらないんだぜ」

「へえ、そうですか」

「そうさ。このごろは女中や家政婦は払底している。もしあったとしても、給料が相当だからね。その点、亭主のおふくろならタダだ。飯の仕度から掃除、洗濯、留守番、子供が生まれりゃ守まで、一切合財なんでもやらせてタダですむのは、おふくろのほかにはないだろう」

「だば、母親はタダの女中兼家政婦ですか」

「そう。利用価値の再認識だな」

緒方は二本目のビールに手を出しながら、一郎を振り返っ

た。

「君んこの珠ちゃんだって、向うのおふくろさんと、うまくやつてるんだろう」

「うん。しかし意味がちがうな。そんないやな女に仕立てた覚えはない」

「それはそうさ。君の娘だから……。ところで、話というのはなんだ」

「たいしたことではないんだが……」

一郎はそろそろ客の立て混みはじめた店のなかを、ちらりと見やって声を落した。

「最近うちの株で、纏まった買い筋はないかね」

「どういう意味だ。買い占めの心配でもあるのか」

「わからん。おそらく、そんなことはないだろうが、うちの総務部長がどこかで噂を聴いたらしいんだ」

「なにかの間違いだろう」

緒方は一郎の顔を覗き込んだ眼に笑いを溜めた。

「多少買いが集まっているのは事実だが、少なくとも眼立つほどの大口はないな。分散買いでカムフラージュしているとすれば別だが、こいつは疑えばきりがないからな」

「それを調べてみてほしい」

「おいおい。そうあっさり言うがね、そいつは容易なことじゃないぜ」

「正確な実体は掴めないにしても、もし事実があるのなら、どこかで匂いぐらいはするはずだ。ひとつ骨を折ってみてくれ」

「堀田先輩の命令とあれば、当ってはみるがね。ひでえことになったな。今晚の勘定はそっち持ちだぞ」

「引き受けてくれるか。ありがたい。もちろん調査費は出す」

「よしてくれ、水臭え」

それから二人はたわいのない話を肴に、腰を据えて飲み出したが、二時間ほどすると、緒方はモーニングの上衣を肩にかついで立ちあがった。

「さあ、河岸かじを変えよう。キャロットだ」

いつもの梯子癖であった。

「よかろう」

一郎はひとつ場所で落ちついて飲むほうが性に合っているのだが、こういう場合は後へは退かない。一緒に飲みだしたら、特別な理由のないかぎり、最後までつきあうのが彼の主義であった。

二人は車を拾って、銀座へ舞い戻った。

西銀座も新橋に近い、ある航空会社のビルの地階にあるそのバーでも、二人は古い客であった。

店も狭いし、ホステスも三、四人しかいないひっそりした

店だが、英国風のくすんだ落ちつきを持ったつくりで、調度もそれにふさわしく、渋いがかしりしたものを選んである。

胸間声で流行歌をわめいたりする客は、あまり寄りつかない。だから、いつも静かである。それが、マダムマダムの氏家志保子の雰囲気でもあった。

二人が鉄の鋏を打った厚い桎の扉を押して、なかへ入ってゆくと、奥の客席から志保子が立ってきた。

「いらっしやいまし」

ほころんだ唇のあいだから、まぶしいような白い歯が覗く。ほんとうは小柄なのだが、ほっそりした軀つきで着物の着こなしがうまいので、かなりの身長に見える。

「やあ」

と、一郎は自分でもわかるほど無愛想な声になって、彼女から眼をそらしたまま、スタンドのとまり木に腰をおろした。

人妻役ではならぶ者がないと言われている、ある映画女優に似ているというこのマダムマダムの前に出ると、いつも一郎は妙に落ちつかなくなる。心のどこかに、遠い潮騒に似たざわめきが波立つのである。五十をすぎた男が、世間知らずの若者のようにぎこちなくなる。それを覚られまいとして、よけい無愛想になってしまうことも、彼は自分でわかっていた。

むかしは欧州航路の客船に乗っていたという、身綺麗な白